

『トロイア物語』の変容

—英雄たちの死をめぐる—

酒 見 紀 成

ホメロスの『イーリアス』では、アキレウスはヘクトールを一騎討ちによって討ち取る(第二十二歌)。ところが、シェイクスピアの『トロイルスとクレシダ』では、「おれはこのとおり武装を解いている、待ってくれ」(小田島雄志訳)と言うヘクターを、アキリーズは「これが目指す相手だ、討つてとれ」と言って、部下のマーミドンたちに四方八方から猛烈に斬ってかからせ、ヘクターは惨殺される。これは大きな違いである。アキレウスのこのような卑劣な殺し方は、誰が始めたのであろうか。

ウェルギリウスの『アエネーイス』には「アキレウスが投げ放つ、槍に豪勇ヘクトルが、倒れたのみか……」(第一巻、泉井久之助訳)とあり、ほぼホメロスと同じである。これが伝統的な叙述である。そこでは神々が登場し、ヘーレー、アテーナー、ポセイドーンはギリシア勢を助け、アプロディーテー、アレース、アポローンはトロイア方の味方をする。例えば、ヘクトールがアキレウスと闘った際、アテーナーはヘクトールの弟のデーイポボスの姿をとってヘクトールの傍に立つ。ヘクトールは弟が助けに来たと思い、アキレウスとの一騎打ちを始める。すると、デーイポボスの姿が突然消える。なぜなら、オリュンポス山上でゼウスが二人の運命を秤ではかると、ヘクトールの皿が冥界の方に傾いたため、アポローンがヘクトールを見捨てたからである。そして彼はアキレウスに討たれる。しかし、古くから、このように神々が人間たちの戦闘に介入することへの反発があった。早くも2・3世紀頃には、そのような神々の介入を排した戦記が現れる。チョーサーの *The House of Fame* 『名声の館』にも名前が出て来るが、ディクテュスの *Ephemeridos belli Troiani* 『トロイア戦争日誌』とダーレスの *De excidio Troiae historia* 『トロイア滅亡の歴史物語』がそうである¹。いずれも元はギリシア語の散文で書かれていたらしいが、それぞれ4世紀と6世紀にラテン語に訳されている。そこではヘクトールの死はどのように描かれているだろうか。

ディクテュスには、「アキレウスは、少数の忠実な仲間を選んで、トロイア勢に対して伏兵を置くよう急いだ。彼は、彼らの無防備なところを襲い、彼らが川を渡ろうとしていた

ところを包囲し、何が打ちかかってきたのか分からぬうちに、彼らを殺した。ヘクトルならびに彼と一緒にいたもの全員が殺された」(岡三郎訳)とあり、シェイクスピアの描写にかなり近い。次にダーレスはどうかと言うと、「ヘクトルはアキレウスの脚に傷を負わせた。ところがアキレウスは痛みをこらえ、いよいよ厳しく詰め寄り、さらに詰め寄り続けて、遂に勝った」(岡三郎訳)とあり、こちらは一騎打ちのようである。興味深いのは、トロイア方であったプリュギア人のダーレスの方が一騎討ちで、ギリシア側に立って書いたとされるディクテウスの方がアキレウスに手厳しいことである²。彼の叙述に現れる「無防備な」という形容詞がキーワードである。

後世に最も大きな影響を与えたのは、サント・モールのブノワの *Le Roman de Troie* 『トロイアの物語』(1160年頃)であろう。150部もの写本が残るガイド・デッレ・コロネネの *Historia Destructiones Troiae* 『トロイア滅亡史』(1287年頃)も、Caxtonが英語に訳したラウール・ルフェーブルの *Recuyell of the Historyes of Troye* 『トロイア史集成』(1464年)も、ブノワの本を下敷きになっているからである³。そのブノワは、岡三郎氏の解説によれば、自分はホメロスにではなく、「自分の眼で事実を見るがままに」書いたダーレスに従うとはっきりと書いている⁴。そうであれば、ブノワの記述も一騎打ちとしたダーレスに従っているはずである。

ところが、ブノワの描写は少し違う。アキレウスが戦場に戻ってみると、ヘクトールが一人の王を倒し、彼を捕えて自分たちの部隊へ引き立てようとしていた。その時、彼は王の面頬を掴み、自分の盾を外していた。彼の胸が露わになっているのを見たアキレウスは、槍を構えてヘクトールに向かって一直線に馬を駆けさせ、致命傷を負わせた⁵。——ガイドのラテン語訳もブノワとほぼ同じである。「ヘクトールはあるギリシアの王に襲いかかり、彼を捕え、分隊から引き立てようとしていた。そのため自分の盾を相手の背中に投げかけていた。彼の胸は無防備であった。それを見て、アキレウスは強力な槍でヘクトールの腹部に致命傷を与えたのである」(第二十一巻、岡三郎訳)。興味深いのは、ブノワがアキレウスのことを「あの極悪人は(li coilverz)」と呼んでいることである。それはアキレウスがヘクトールの隙に乗じたからであろう。しかし、アキレウスが戦場を離れたのはヘクトールと一騎打ちをし、彼に槍で腿の中ほどを突かれたからであった。その意味では、ダーレスの一騎打ちの延長線上にあると言える。それでも、アキレウスの行為は英雄らしくなく、そのように翻案したブノワの反ホメロス、反アキレウスのスタンスが垣間見える。——また、ブノワはいろいろな話を付け加えている。例えば、トロイルスとカルカースの娘ブリセイス(Briseis/ Brysayda)との恋物語を創作したのも彼である。ダーレスの語ることを真実とせねばならぬと言いながら、その比較的短い戦記から三万行余のロマンスを作り上げたのだから。そしてブノワは『トロイアの物語』をエレアノール・ダキテーヌに捧

げている。彼女こそ「イングランドの宮廷でロマンスの普及に力を入れ」た人物だった⁶。

キャクストンの英訳（1474年）は、彼がまだブルージュにいた頃、ブルゴーニュ公爵夫人マーガレットから頼まれてラウル・ルフェーブルの *Recuyell of the Historyes of Troye* を英語に翻訳したもので、英語の最初の印刷本であるが⁷、キャクストンの英訳も、Lydgate が英訳した *Troy Book* (1412-20年) も、ブノワやグイドの記述とほぼ同じである。キャクストンには第三巻 (p. 613) に

But Hector caste to hym
a darte so fiersly / and made hym a wounde in his thye
And than Achilles yssued out of the batayll and dide
do bynde hys wounde and toke a grete spere in purpose
to slee Hector yf he myght mete hym. Amonge all these 20
thynges Hector had taken a moche noble baron of Grece
moche queyntly and rychely armed / And for to lede
hym oute of the ooste at his ease / had caste his shelde
behynde hym at his backe / And had lefte his breste dis-
couerte and as he was in thys poynte and toke none 25
hede of Achylles that cam pryuely vnto hym and putte
thys spere wyth in his body. And Hector fyll down
dede / to the grounde;

「しかし、ヘクトールは彼（アキレウス）にすごい力で投げ矢を投げ、彼の太腿に傷を負わせた。そのときアキレウスは戦闘から外に出て、傷口を縛らせると、今度ヘクトールに出会ったら殺してやろうと大きな槍を手にとった。その間、ヘクトールはとても入念に、かつ立派に武装した一人のギリシア人の貴族を捕えていた。そして彼を軍勢から楽に連れ出せるように、盾を自分の背中に投げかけており、胸が露わになっていた。彼がこの格好でいたので、密かに近づくアキレウスに気づかず、その槍でからだを貫かれたのだった」とある。また、リドゲイトの訳もほぼ同じである⁸。ルフェーブルは本文中で何度もダーレスの名前を出しているにも拘わらず、この箇所は明らかにグイドに拠っている。そしてグイドはブノワのラテン語訳である。ただ、ラテン語の散文とフランス語の韻文の違い、前者が *Historia* で、後者が *Roman* という違いのほか、グイドはブノワに見られる「宮廷風恋愛の描写を短縮し、代わりに女性や恋愛を非難する教訓的な歴史物語に改作」しているという説 (W. B. Wigginton) もある⁹。

ボッカッチョの *Il Filostrato* 『恋の虜』に依拠してチョーサーが書いた『トロイルスとクリセイダ』もグイドの記述とほぼ同じである——「ヘクターがある国王の兜の面頬に手をかけて引きずっている時に、アキリーズが不意に鎖帷子を通して彼のからだを突き刺し、かくてこのすぐれた騎士は一命を失ったのでした」(宮田武志訳)¹⁰。「無防備な」がないだけ中立的であるが、ボッカッチョもまた概ねブノワに基づいている ("It is itself loosely based on *Le Roman De Troie*, by 12th century poet Benoît de Sainte-Maure"¹¹)。彼はグイドのラテン語訳を通してトロイルスとブリセイダの恋物語を知ったのであり、Briseida を Criseida に変えたのもボッカッチョである。

このように見てくると、家来たちに包囲させて殺したとなっているのは、ディクテウスとシェイクスピアくらいである。ところが、実は、グイドの描くアキレウスによるトロイルス殺害の場面がシェイクスピアの描写によく似ているのである。トロイルスは中世の伝説ではヘクトールに次ぐ勇士である。すでにダーレスは彼を「プリアムスの息子のなかでは最年少とはいえ、勇敢さではヘクトールに肩を並べていた」と書いている¹²。グイドの『滅亡史』によれば、アキレウスは出陣する前に部下のミュルミドーン勢を召集し、トロイルスに対して戦闘をどう進めるかについて命令と助言を与えた(第二十六巻)。彼らはトロイルスを取り囲むための努力だけに専念し、彼を抵抗できぬよう取り抑さえ、アキレウスが来るまで、トロイルスが戦えないようにしておくことにした。そしてミュルミドーン勢は四方からトロイルスを取り囲み、彼の馬を殺し、幾度も槍で彼に傷を負わせた。さらにトロイルスの兜をその頭から奪い取り、鎖帷子をも激しく破った。そこへアキレウスが到着し、トロイルスが無防備になっているのを見るや、猛然と彼に襲いかかり、残忍にも自分の抜き身でトロイルスの頭を切り落とし、その首を馬の足の間に放り投げた。そしてその死体を持ち上げ、自分の馬の尾に縛り付け、全軍の中を引きずり回した。——シェイクスピアはこのアキレウスによるトロイルス殺害の場面を、アキレウスによるヘクトール殺害の場面に利用したものと思われる。それが可能であるのは、シェイクスピアではトロイルスがまだ生きているからである。

トロイルスのことも『イーリアス』は、「馬を駆って戦うトロイロス」を軍神アレースが殺してしまったと語るだけである(第二十四歌)。だが、ディクテウスでは、両軍の戦闘にてプリアモスの二人の息子、リカオンとトロイルスは捕えられ、アキレウスの命令で二人の喉が切られた、と言う。一方、ダーレスの記述はグイドのそれに近い。アキレウスは部下のミュルミドーン人が情け容赦なく殺害されるのを見て、再び戦闘に参加したものの、トロイルスに負傷させられ、六日間戦列から離れた。七日目、アキレウスはミュルミドーン人たちを整列させ、トロイルスめがけて勇敢に攻め立てるよう激励した。ミュルミドーン勢はトロイルスを攻め立てたが、トロイルスは彼らを多数殺した。その時、彼の馬が負

傷し、足をもつれさせ、彼を放り出して倒れた。そこへすばやくアキレウスが飛び出て、彼を殺した。——この描写には特に「裏切り」の要素は見当たらない。グイドは、と言うことは、粉本の著者ブノワは、明らかにダーレスの記述に依拠しながら、アキレウスの「残酷さ」を強調すべく脚色を加えたものと思われる。アキレウスがトロイルスの首を打ち落とし、その死体を自分の馬の尻尾に結び付け、引きずり回す場面もすでにブノワに見られる¹³。グイドはメッシーナ出身の詩人・歴史家・判事であったが、フランス人もイタリア人もイギリス人もトロイア最良なのだろう。英国の神話上の祖先である Brutus はトロイの勇士 Aeneas の孫であり、アエネアースは古代ローマ建国の祖ということになっているからである。

グイドは第二十六巻でさらに言う。アキレウスは裏切りによってヘクトールを死へ追い込んだ、哀れなホメロスよ、アキレウスは策略による以外は、勇猛果敢な人物を誰一人殺していないのだ、と。チョーサーもこのことを知っていたようである。岡三郎氏も指摘されているように、このような反ホメロスの叙述姿勢を「妬み」と言っているところがチョーサーらしい。さすが、英詩の父である。『名声の館』から引用する。

ところが、良く分かって来たことだが、
彼等の間に、多少の妬みがあった。
ある者が言うには、ホメーロスは嘘を付き、
その詩の中に虚構をなし、
その上、ギリシャ方に味方しており、
それ故、その作品は作り話に過ぎぬ、と。 (1475-80)

チョーサーの言う「ある者」とは、グイドも同じ趣旨のことを書いているが、恐らくサント・モールのブノワのことであろう。ブノワはホメーロスについて「その作品たるや、真実を語っておらぬ」とはっきり書いているからである¹⁴。ただし、『名声の館』にはグイドやダーレスの名はあっても、ブノワの名はない。その代わり、“Lollius” という誰を指すのか今もって分からない名前が出て来る¹⁵。

ホメーロスはトロイルスのことを、彼はすでに死んだと語っているだけであった。その後、アキレウスに殺される話が出来上がり、中世になってブノワがトロイルスとカルカースの娘ブリセイダとの恋物語を加えたのである。ところが、アキレウスとプリアモス王の末娘ポリュクセナとの恋物語はブノワの創作ではなく、すでにディクテュスとダーレスにもある（ポリュクセナという女性はホメーロスには出て来ない）。アキレウスはその恋ゆえ

に、戦いには出ないとプリアモス王とヘカベーに約束し、実際にしばらくの間は戦場に出なかった。が、部下のミュルミドーン人が多数トロイルスに殺されるのを見て、怒りに駆られてトロイルスを殺したのだった。そして二人の勇敢な息子を殺されたヘカベーの策略により、アキレウスはポリュクセナへの愛のため、剣だけを帯びてネストールの息子と二人でアポロンの神殿へ出向く。そして隠れていたパリス（アレクサンドロス）とその部下たちに襲われてアキレウスとアンティロカスは命を落とす。これはグイドの語る場所であるが、ディクテウスでもほぼ同じである。アキレウスは武器を一切持たず、アポロンの神殿へ行く。そこへデーイフォバスがやって来て、祝辞を述べながらアキレウスを抱擁し、彼にしがみつく。そしてアレクサンドロスが剣を抜いて走り出て、アキレウスの脇腹に二撃を打ち込む。——「ご自身の浅はかな大胆さゆえにやられたのですよ」と言うアイアースに、アキレウスが息を引き取りながら言う、「デーイフォバスとアレクサンドロスにやられた。あの二人はポリュクセナのことやって来た、人をだますつもりで、じつに卑劣にも」と。勇将に相応しからぬ、実にあっけない殺され方である。彼が息を引きとると、アイアースは遺体を肩に担いで森の外へ運び出す¹⁶。

ダーレスの描写もほぼ同じである（デュクテウスに従ったのであろう）。が、『イーリアス』は老王プリアモスによるヘクトールの遺体引き取り、それに続くヘクトールの葬儀で終わっており、従軍すれば必ず討死するという運命にも拘わらず、アキレウスはまだ生きている。その後の話では、アキレウスがヘクトールの従兄弟にあたるエティオピア王メムノーンを討ち、トロイア市のスカイアイ門に迫った時、弓術に巧みなパリスによって踵を射られ、アキレウスは死ぬ。2004年のアメリカ映画『トロイ』でも、アキレウスはパリスに踵を、そして胸を射られて死ぬ。この方が後代のディクテウスやダーレスの描く騙し討ちより英雄の死に相応しい。と言うのも、ホメーロスの二大叙事詩は、紀元前3世紀までには「ギリシア民族の共有物となり、学校教育の根底となり、またアテーナイに於てはPanathenaia 祭に於て朗誦せられ、教養ある人士はすべて殆ど之を全部暗記してゐる程に親しまれるに至って」いたからである¹⁷。従って、アキレウスとポリクセナとの恋やトロイルスとブリセイダとの恋、待ち伏せや騙し討ちなどが加えられた後代の『トロイア物語』は、ホメーロスのものとは別の物語と見て、『新トロイア物語』とでも呼んだ方が良さそうである。

注

¹ 『名声の館』の第三巻にはトロイアの名声を挙げるために精励した作家たちの名前が列挙されていて、Dares（ダーレス）と Tytus（ディクテウス）の名は Omer（ホメーロス）

の次に位置する。

And by him (Stace) stood, withouten les,
Ful wonder hy on a piler
Of yren, he, the gret Omer;
And with him Dares and Tytus
Before, and eke he Lollius,
And Guydo eke de Columpnis,
And Englyssh Gaufride eke, ywis;
And ech of these, as have I joye,
Was besy for to bere up Troye. (1464-72)

ここに Tytus とあるのは Dictys の間違いであり、その短縮形 Dite は『トロイルス』の第一巻 146 行の脚韻の位置に見られる。そして Dares Frygius は『公爵夫人の書』1070 行に、Dares は *HF* III. 1467, *Tr* I. 146, *Tr* V. 1771 に現れる。

- ² キャクストーン版『トロイア史集成』(*Recuyell of the Historyes of Troye*) の第三書の終わりの方にも次のようにある：

For
dyuerce men haue made dyuerce bookes, whiche in all
poyntes acorde not as Dictes, Dares, and Homerus,
for Dictes & Homerus as Grekes sayn and wryten fauorably for the Grekes, and gyue to them more worship
than to the Troians. And Dares wryteth otherwyse
than they do. (pp. 701-2)

プリュギアとトロイアは同盟関係にあったから、ダーレスはトロイア方である。予言者カルカースはホメロスとディクテウスではギリシア人であるが、ダーレスは彼をプリュギア人とし、ブノワやグイドはトロイア人の司祭としている。

- ³ 「グイドがブノワの名を挙げていないのと同じように彼 (ルフェーブル) もまたグイドの名を挙げていない！」(『古典の伝統 上』、p. 59)。それで久しい間、フランス語のブノワの作品の方がグイドのラテン語の『滅亡史』を下敷きにしていただわれていた。岡三郎氏の解説によれば、それが逆であると証明されたのは 1869 年のことである。
- ⁴ 『ディクテウスとダーレスのトロイア戦争物語』、pp. 228-236。「自分の眼で事実を見るがままに」書いたのであれば、紀元前 12 世紀頃の記録ということになるが、それほど古い記録が残っていたとは考えられない。この二冊が「偽書」とされる所以である。が、

ディクテュスの本の一部を記した3世紀前半のギリシア語のパピルス断片が19世紀末に発見されているので、ギリシア語原本が2・3世紀頃に書かれていたことは確かであろう。ブノワは、松本博之氏の論文「*The Destruction of Troy*とトロイ物語群」(1991)によれば、「ダーレスを原典としながら、24,329行から結末まではディクテュスを利用している」。

- 5 この要約は広島大学文学研究科の今田良信教授による訳(私信)に基づく。興味深いのはこの要約がグイドの散文のラテン語訳とよく似ていることである。つまり、グイドはブノワの三万行余の物語詩を要約する形でラテン語の散文に訳しているのである。
- 6 エレアノール(Eleanor of Aquitaine)は、ルイ七世との結婚を無効にもらって二年半後、アンジュー伯ヘンリーと再婚する。そしてヘンリーがイングランド王になると、「イングランドの宮廷でロマンスの普及に力を入れる」(石井美樹子)。エレアノールはトルバドールの第一人者であった祖父ギョーム九世の影響を受けていたようだ。
- 7 キャクストンの、従ってルフェーブルの『トロイア史集成』は、その標題とはやや異なり、第一書はギリシア神話、第二書はヘーラクレース神話、第三書はトロイの包囲と陥落の物語からなる。キャクストン版を校訂したH. Sommerによれば、第一書と第二書はボッカッチョの*Genealogia deorum gentilium*『異教の神々の系譜』も材源になっているらしい。松本(1991)、p. 76 参照。
- 8 リドゲイトの方がグイドやキャクストンの描写よりもやや詳しい。傷の手当を終えたアキレウスが戦場に戻って来てヘクトールを倒すまで、ブノワでは18行(II. 16213-230)であるが、リドゲイトは69行(Book III, 5354-422)も費やしており、少し冗長である。それを読むと(<http://www.lib.rochester.edu/camelot/troyprfr.htm>)、ヘクトールは捕えたギリシアの王をただ連行していたのではなく、その王の見事な衣装を奪うつもりで、彼を自分の馬に乗せ、味方から離れたのである。立派な武具に対する執着はヘクトールの欠点であろう。グイド(第十五巻)によれば、彼はパトロクロスを殺した時も、その光り輝く武具が欲しいという願望に捕えられている。また、リドゲイトに「この残酷で有害なアキレウスが」(l. 5412)とあるのは、チョーサーの"cruel Achilles"(HF, 1463)に呼応する。確かに、怒ったアキレウスは常軌を逸した振る舞いをするのがあった。ヘクトールを殺した時も、彼の遺体を二輪戦車の後ろに結び付け、野原を疾駆して回っている。——ところで、『トロイア物語』の英訳は、松本(1991)によれば、他に4つ知られている。そのうち頭韻詩形の*Gest Historiale of the Destruccon of Troy*『トロイ滅亡実録』(? 1385年以降)と*The Laud Troy Book*『ロード・トロイア本』(1400年頃)はグイドの翻訳、*The Prose Sege of Troye* (15世紀)はグイドの縮約版、そして*The Seege or Batayle of Troye* (14世紀)はダーレスが底本とされる。
- 9 チョーサーのクリセイデは寡婦であり、父のカルカースがトロイを裏切ったため、肩身

の狭い思いをして生きている。一方、シェイクスピアのクレシダは才気煥発で、したたかな乙女であり、ギリシア側の知将ユリシーズの目には「あのような浮気女は口も達者なら、色事も達者だ」と映る。このような浮気女としてのクリセイデ像はプロワやグイドから始まるらしい。グイドの第8巻に曰く、「彼女は、その魅力によって数多くの恋人をひきつけ、かつまた数多くの恋人を愛したが、その恋人達に対して、彼女は貞淑さを持ち合わせなかったのである」と。だから、シェイクスピアもチョーサーの『トロイルス』ではなく、プロワ系の、例えばキャクストンの *Recuyell* を底本としたのであろう。

- 10 2013年11月30日・12月1日に開催された日本中世英語英文学会 第29回大会において、慶應義塾大学大学院の趙泰昊（ちょうてほ）さんは、チョーサーがトロイルスをドン・キホーテのような騎士として描くことで「騎士道」の倫理規範を現実世界にそぐわないものとして批判しており、詩人はその着想をボッカッチョのロマンス *Filocolo* から得たのではないかと主張した。チョーサーが中世のロマンスを古いと感じていたことは確かであるが、「騎士道」に批判的であったとは俄かには賛成できない。『カンタベリ物語』は、勇敢で思慮深く、欧州各国における数々の遠征で戦歴を重ねた名誉ある騎士の話で始まるからである。
- 11 Wikipedia の記述に拠る。
- 12 『ディクテウスとダーレスのトロイア戦争物語』、p. 158.
- 13 *Le Roman de Troie*, ll. 21367~21450 は広島商船高専の前田弘隆氏に和訳して頂いた。プロワはここでも「変節漢たるアキレスは」と書いている。
- 14 『ディクテウスとダーレスのトロイア戦争物語』、p. 229.
- 15 "Lollius" なる語は *HF* 1468 のほか、*Tr* I. 394 と *Tr* V. 1653 にも現れる。3例とも脚韻の位置にある。いろいろな説があるが、G. L. Kittredge と R. A. Pratt は、ホラティウスが友人の Maximus Lollius に言及した箇所が誤解されたのであろうと言う。そこには "Troiani belli scriptorem, Maxime Lolli, / dum tu declamas Romae, Praeneste relegi," *Epist.* 1, 2, I (「Maximus Lollius くん、君がローマで演説の練習をしている頃、僕はプライネステでトロイア戦争の作家（ホメーロス）を読み返しているよ」と書かれていたのが、*scriptorum maxime* "the greatest of the writers" と誤解され、Lollius = トロイア戦争の最も偉大な作家、となったのであろう、と。
- 16 アイアースはサラミスの王テラモーンの息子である。母はプリアモス王の妹のヘーシオネー (Exione)。だからヘクトールとは従兄弟にあたる。その昔、ヘーラクレースのトロイア遠征の際、トロイアの王ラーオメドーンは殺され、子供たちもプリアモスを除いて殺されたり、拉致されたりした。ヘーシオネーも連行され、テラモーンに与えられたのである。だから、トロイア戦争の原因となったパリスによるヘレーネーの拉致も理由がないわけではないのである。大アイアースはアキレウスに次ぐ闘将。だが、シェイクス

ピアは道化のサーサイティーズに「馬のほうはまだ話がわかる」と言わせている。

17 高津春繁、*Homeri ILLADIS I*, p. xx.

参考文献

- B. A. Windeatt, ed., *Geoffrey Chaucer Troilus & Criseyde* (Longman, 1984)
- H. Osker Sommer, *The Recuyell of the Historyes of Troye*, 2 vols. (London: David Nutt, 1894)
- Hiroyuki Matsumoto, ed., *The Destruction of Troy: A Critical Edition* (University Education Press, 2011)
- Léopold Constans, *Le roman de Troie par Benoit de Sainte-Maure* (Johnson Reprint, 1968)
- Norman Davis, et al., *A Chaucer Glossary* (Oxford University Press, 1979)
- Jacqueline de Weever, *Chaucer Name Dictionary* (Garland Publishing, 1996)
- Larry D. Benson, ed., *The Riverside Chaucer* (Oxford University Press, 1987)
- 石井美樹子、『王妃エレアノール』(平凡社、1988)
- 泉井久之助訳、『アエネーイス 上・下』(岩波文庫、1976)
- 岡 三郎 訳・解説、『ディクテュスとダーレスのトロイア戦争物語』(国文社、2001)
- 岡 三郎 訳・解説、『グイド・デッレ・コロンネ トロイア滅亡史』(国文社、2003)
- 小田島雄志訳、『トロイルスとクレシダ』(白水社、1983, 1988)
- 高津春繁、*Homeri ILLADIS I* (イーリアスの第一巻) (岩波書店、1950)
- 高津春繁、『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、1960, 1988)
- 松平千秋訳、『イリアス 上・下』(岩波文庫、1992)
- 松本博之、「*The Destruction of Troy*とトロイ物語群」、*Helicon* (岐阜大学、1991)
- 宮田武志訳、『ジェフリー・チョーサー トゥローイラスとクリセイデ』(ごびあん書房、1987)
- G. ハイエット著、柳沼重剛訳、『西洋文学における古典の伝統 上・下』(筑摩書房、1969)